

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 5

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していただきます。



伊藤公平(いとう・こうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。

富山にもう一人知人がいる。最も新しい知人の二人で、富山県埋蔵文化センターに勤めるSさん、考古学者である。きっかけは札幌の古書店・サッポロ堂主人石原誠さんから、『野付牛町誌』の復刻を目論んでいる人がいるが、探しあぐねているので、手持ちの『野付牛町誌』を譲ってもらえないか―という電話があつてのことである。

Sさんは平成十六(二〇〇八)年にお母さんが亡くなり、その追善供養のために、お母さんの故郷・福島県内郷村(現在のいわき市の一部)の『内郷村誌』(明治四二―一九〇九)と『(内郷村)郷土誌本』(昭和五二―一九三〇)を復刻発行した。Sさんは供養と同時に子供たちにおおあちゃんの故郷はこんな所だったんだよと伝えたいと思つたそうである。そのために体裁も初版のままである。

その二年後、お父さんが亡くなったので、同じ趣旨で『相内村誌』(昭和二二―九二七)とその母村の『野付牛町誌』(大正二五―一九二六)を復刻しようとしたのである。石原さんは電話でそう話し

てくれた。

私は蒐集家ではないので、文書の出典がはつきりしていて、きちんと読めればコピーでもいいと思つている。Sさんは復刻本を提供するといつてくれてもいい。原本を提供することにした。その復刻本二冊はいま手元にある。

それにしても、である。ふつう、自分史などを書くこうとする人は、戸籍や古文書などに頼つて「父のふるさととは…」「母の出自は…」とほんの数行か、長くてもほんの数ページで始末するのがごく一般的なのに、Sさんは丸々二冊を、それも父の地・母の地を郷土史二冊ずつ使って説明しようというのだから、壮大といえは壮大、向こう見ずといえはこれまた途方もない向こう見ずである。全く新しい自分史の構築法と言つていいのかどうか。

そのSさんが来北して一夜盃を傾けあつた。その折、こんどはその祖父の入植地だった江部乙の史誌の発刊を目論んでいると言つた。考古学者Sさんはこんなことでも「掘る」ことにこだわりつづけているようである。